
不死鳥(レイラ、黒い牙)

ダフネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不死鳥（レイラ、黒い牙）

【Nコード】

N1720B

【作者名】

ダフネ

【あらすじ】

黒い牙に、レイラが潜入する所から、話は始まります。二ノとの絡みも書いてみました。

血の匂いがする。

きつとそれは犠牲者達の血の匂いだ。

この場所で流される血は砂によって隠されるけれど、完全に消えはしない。

女は、鉄格子の間から笑顔で場内を回る男を石で出来た椅子に座ったまま見つめていた。

その男は得意げに、

自分の武器である重そうな斧を振り回しながら観客にアピールをしている。

短く刈り込まれた髪と、鎧から出ている生身の腕や腹には所々切られたであろう跡。

たくましい巨体。おそらく自分の2、3倍はあるであろう。観客達がその男に声援を送っているのが聞こえる。

やがて巨体の男が場内を歩くのをやめ、所定の位置について鉄格子越しにこちらに視線を向けた。二人の視線がぶつかり合う。

血の匂いが更に濃くなった気がした。

「おい。」

彼女とは別の場所で男の様子を見ていた男から、ぞんざいな声がかけられた。

だが、答える気にはなれない。

「いよいよだな、姉ちゃん。しっかりやれよ。」

それが自分に向けられた言葉なのだと当然分かっているのだが、ほんの少しだけ顔をしかめてゆっくりと立ち上がった。

「あんたには期待してんだぜ。顔もよけりゃ腕もいい。あんたに賭け続けて俺は負け無しだ。」

そう言って男は笑いながらさっきから何も言おうとしない女を見る。燃えるような赤い髪に瞳。細面の、整った綺麗な顔に細い身体つき。

美人だと十人中九人は言う顔だ。

とてもじゃないがこんな殺伐とした闘技場にいるべき女ではないと思う。

彼女は無口で、周りの者は彼女の本名も、ここに来るに至るまでの詳しいいきさつも知らなかった

（闘技場に来るような連中はほとんどそうだ。）

が、腕のいい傭兵なのだと噂で聞いていた。

事実、彼女は今まで対戦相手に負けた事はない。

だが一方で彼女は相手に止めを刺さない、どこか甘い所もあると男は知っていた。

周囲がそんな彼女につけたあだ名は＜^{ヒレンジャク}緋連雀＞

赤い髪と瞳。

そして彼女独特の、鳥のように軽やかな剣技と身のこなしに対して付けられた。

「けど、さすがに今回はどうだ？対戦相手にびびったかい？

あんたも知っていると思うが相手も負け無し、だ。一回もな。」

彼女が何も喋らないのをいい事に、男が調子に乗って続ける。

「あいつの斧はすげーぜ、肉を切り裂いて声も出させず細切れにする。

命乞いすらさせて貰えないんだぜ？今まで何十人と・・・」

それを聞いた女が鋭い目を男に向ける。

と、途端に男が弁解するようになってつけたような笑みを浮かべる。

「そんな顔するなよ、ここは闘技場だぜ？殺しは当たり前なんだからな。」

それを聞いて、女は視線を元に戻した。

ここは、広大なエレブ大陸の東にある大国の一つベルンの闘技場。

闘技場とは掛け金を支払い、

出てくる相手と戦って勝てば賞金がもらえる施設である。

このエレブ大陸の各地にあり、

腕のたつものはここにこぞって集まり自らの腕を試そうとする。

そんな彼らを（特に剣士に限定せず）剣闘士と言うのだが、試合は命がけのものだった。

だから悪く言ってしまうえば殺し有りの見せ物場だった。

闘技場は市民の娯楽施設の一つだ。

だが、たとえ市民に対して娯楽を提供しているだけとしても、人が死ぬのを歓声上げて喜ぶ様子を見るのは複雑だな・・・と考えながら、

目の前の鉄格子がゆっくり上がるのを見つめていた。

「さあ、俺の相手はどいつだ!？」

大男の斧が恐ろしいスピードで風を切る。

この闘技場でも名を馳せている男。観客のほとんどが勝つのはこの男だと信じていた。

やれやれ、相手は可哀想に・・・

そう口では言いつつ哀れな犠牲が拝めるものだど期待しているのが分かる。

門が開くのを見て、出てきた相手を凝視する。

対峙するのは、女だ。

「女？」

「女だ・・・」

あちこちからどよめきが起こる。

「がはははは!! 女、来る場所を間違えたのではないか？」

本気で俺と勝負するつもりか？言っておくが手加減しねえぜ。」

「構わん。」

女が身構えた。

「来い。」

男は、女のその言葉が気に障ったようだった。

「美女が切られるのを見るのもまた一興。」

そう言って表情を陰しくすると「おい! 早く合図をしろ!!」と主催者に怒鳴る。

——始め!!

号令が下り、待ってましたと言わんばかりに男が突進して間合いを詰め、斧を一閃させる。

その動きは巨体からは考えられない程素早く、かつ無駄の無いものだった。

だが、女は自分に向かって突進して来た。

間合いに入ったのでにやりと笑い、斧を一閃させたが、女は素早くかわした。

「!」

「上だ」

女は男の体をバネにしてひらりと飛び上がると、舞うように男の頭を思い切り踏みつけ、

地面に下りた際に相手の後ろに回りこみ、剣を閃かせて相手のアキレス腱を切った。

「がっ・・・」

一声呻いて、大男がどうっと倒れた。そして痛さの余り気絶した。あまりのあっけない結末に、大半の観客が口をぽかんと開けたままだった。

彼女は、そいつの指がまだかすかに動いてるのをちらっと見ると重い気分でその歓声を聞きつつ何とか笑顔を作り、

一応自らの使った銀の剣を掲げて観客に形式だけの礼をして退場しようとする。

その瞬間、会場中に拍手と歓声が起こった。

その拍手と歓声を後にしながら彼女は客層を思い出していた

観客は平民と・・・闘技がよく見える特別席にいたのは中流や上流階級の者だ。

心の中で、観客全員に対して再び複雑な思いを抱く。

闘技場の用途は腕試しだけではない。公の場での人と猛獣（ライオ

ンや闘牛やイノシシやトラ）との戦いは今でもあるのだが、昔は捕虜や罪人、または異教徒などが犠牲者にされた。

彼らを完全武装した剣闘士が死刑執行を行ったり、お互いに殺し合いをさせられたり。

拳句の果てには動物の餌にされたり、

服に油を塗られて張り付けされ闘技場の中で燃やされたと言う。

やがてこのような形の公開処刑は無くなったが、

今でも腕を試そうとする者が少ない時には

訓練された捕虜や奴隷が見世物の為に参加させられるという。

そう言った形で参加させられる多くの者達の人生は悲惨だ。

たった2、3回の戦闘で生きている者は極稀である。

しかし決闘に勝ち続けることができれば裕福な暮らしができ、

自由を得て豪勢な暮らしをする事が出来た者も少なくはないようだが・・・

女はそこまで考えて、

闘技場と言われる場所に流された血の多さを思いうんざりして思考を止めた。

闘技場で実績を上げながらもそんな考えを巡らせていた傭兵女は、実は生粋の傭兵ではない。

ベルンから離れた場所にあるリキア地方のオスティア。

彼女はその公爵ウーゼルの密偵だったのだ。

密偵である彼女が何故闘技場にいるのか。

それは、彼女がいち早く各地で暗躍する暗殺組織があると言う情報を掴んだからだ。

独自の調査を通じてかろうじて掴めた情報は、

その組織の名はく黒い牙＞であると言う事、

そして本拠地はベルンであると言う事だけだった。

レイラのような密偵は入り込む対象である国民から情報提供者を獲得したり、

逆に潜入した敵の密偵を発見したら、懐柔したり相手に偽情報を掴

ませて逆用する。

更にはその密偵にデマ情報を教えて潜入させてワザと逮捕させたりもする。

賞金を持って待っている主催者の下へ向かう。

闇に生きる者達。

特に牙のような腕利きぞろいの組織ならば

戦闘に長けていればいるほど目に留まる確立が高くなるわ・・・。

そう考えながらレイラは無愛想な闘技場の親父の差し出す賞金を受け取った。

元々賞金に興味はないのだけれど、

自分は一応生活費稼ぎの傭兵と言う事になっている。

ずしりと重い賞金袋に目をやる。金で動く人間は操りやすい。

そう思わせる為に彼女にはどうしても闘技場で名を上げなければならぬのだった。

何度か、怪しい男たちが自分を見張っているのに気付いていた。

たまに、青髪の女：

そして今、男たちの不審な視線を感じながらも、

気付いているという事を表に出さずレイラは彼らの前を通り過ぎる。

「おい。」

一際熱心に彼女の後姿を見ていた金髪の男が、闘技場の親父に話しかけた。

「へ？」

「あの、赤毛の美人は何者だ？」

無愛想な闘技場の親父が言う。

「さあね。最近の新入りでさあ。名前以外分からねえっすよ。」

「そうか。」

金髪の男の物言いに闘技場の管理主は不穏な空気を感じ取ったが

肩をすくめただけで何も言わなかった。

ある日、とうとう、チャンスがやって来た。

「お前」

物陰から20代後半ぐらいの男が音も無く出てくる。

「！」

何が起こつてもいいように構える。

「お前、名は？」

「・・・レイラ。」

「レイラ・・・か。何者だ？」

「傭兵」

その言葉に、ふっと男が笑んだ。この男、油断がならない。

「何故、闘技場の連中に止めをささなかった？」

「・・・。」

レイラは無言で通した。答える気にもならなかった。

ただ、必要以上に殺すのも馬鹿らしいからだとも言えなかった。

「必要に応じてなら、殺せると思うか？」

男が、自分の思考を読んだように言う。

「例えば、性質の悪い貴族連中とかな」

「できる」

そう答えたとたん、くくつと男が笑う。

「気に入った。俺と共に来い。」

男の名前は結局分からなかった。その後、私に与えられた異名は【不死鳥】だった。

この赤い髪に瞳が、伝説の霊鳥を思い起こさせるからなのだと。

レイラはなるべく牙の内情を知るように、それとなく話をするようにしていた。

そしてソーニヤと言う女の存在をつかんだ。

自分は目にかかる事は出来なかったが、人の良さそうなヤンと言う中年の男が、

その女が来てから牙は変わってきたとぶつぶつ言っていた。

ヤンが自分に色々な事を教えてくれるように言いつけられた男のようだった。

黒い牙の面々に顔見せが一通り済んだ後、

ヤンについて歩いていてある扉の前を通りかかった。

「母さん！」

悲しそうな、少女の声がした。

「母さんっ待って！」

「煩いね、近寄らないでちょうだい」

冷たい声。思わず立ち止まった。

「・・・どうした？」

「いえ。」

再び歩き始める。

子供が、母親を慕うのは当たり前前の感情だと言うのに何と言う言い草か。

何故か少女の声が耳に残った。

間も無くレイラはその少女と対面した。紹介されたのだ。

牙の人間からとても可愛がられているという少女。

二ノと言う名前らしい。

意外にも、通されたのは少女の寝室だった。

ベッドの上に少女が横たわっている。熱があるようだ。

「二ノノ！大丈夫か？ほら、女の人に来てくれたぞ。新しい仲間だ」
ヤンが今までとうって変わった口調で少女に話しかける。

明るい緑の髪、瞳。まだ十代前半だろう。

「うんっ大丈夫！」

そして、少女がこちらを向く。

「貴女がレイラさん？あたし二ノだよ、宜しくね！」

無邪気な様子で二ノが手を差し出してくる。

「では、二ノ様と・・・？」

手を握り返しながらかく。二ノが首を横に振った。

「ううん、二ノって呼んで欲しいの。」

側にいた、顔に傷のある紫の髪の男をちらりと向くと、彼はにやつと笑った。

その通りにしてやれと言っている。

「分かりました、二ノ」

「ねえねえレイラさん、あの、あのね…」

「何でしょう？」

「手、握ってもらっていい？」

「まあ」

レイラは微笑んだ。

「これでいいですか？」

「うん。あ、ありがと。レイラさんて優しいね。」

「・・二ノ。宜しければ何か歌って差し上げますわ。」

「え！嬉しい！！」

こっそりと、男二人は外の部屋へ出ていた。

「どうだった、【不死鳥】と二ノは？」

「まあ、あの様子じゃすぐ仲良くなるだろ」

ニヤニヤと笑いながら、紫の髪の男（ラガルトと言う。）は、

【白狼】の肩を叩く。

「しかし、お前も美人を連れてくるのが上手いな。しかも、ひどく優秀なのを。」

それにしても…」

ヤンとラガルトが顔を合わせ、笑いながら頷いている。

「何だ」

「いや、二ノが美人に懐くのはお前らの影響かなって思ったのさ。なあアイシヤ？」

それを聞いて、ストレートな青髪の女、アイシヤが微笑む。

そう言えば・・とロイドは思う。二ノが懐く女は、確かに美人が多いかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1720b/>

不死鳥(レイラ、黒い牙)

2010年10月17日05時04分発行